

# 国木田独歩におけるツルゲーネフの影響

芦谷信和

## 1

国木田独歩の文学がその基本的性格において宇宙・大自然の無  
 限性と其中に浮沈する有限瞬間的な人生の諸相を対比的に描き、  
 宇宙・人生の秘義を痛感させることを目指した文学であることは、  
 すでに定説となっている。そうして独歩にこのような文学思想を  
 植え付ける上で、最も大きな役割を果たしたものが、ワーズワー  
 スであったことも、また異論のないところである。カーライルも  
 こうした面でワーズワースに次いで大きな影響力のあることが、  
 明らかにされている。<sup>①</sup>けれどもツルゲーネフやモーパッサンにな  
 ると、いづれも独歩に対していぶん大きな影響感化を及ぼした  
 らしい西欧作家であることが、たびたび述べられているにもかか  
 わらず、まだいかなる影響感化を与えたかの具体的な研究がほと  
 んどなされていないように思えるのである。ツルゲーネフの影響  
 と言えば、つねに二葉亭訳「あひゞき」(明治二十一年七月・八月「国  
 民之友」)の「武蔵野」(三十二年一月・二月「国民之友」)に発表当時「今の

武蔵野」への影響が論ぜられてきた。<sup>②</sup>けれども独歩に対するツル  
 ゲーネフの影響感化を自然描写の面だけで考えることは、きわめ  
 て偏頗な狭い解釈なのである。ツルゲーネフもまたワーズワース  
 やカーライルとともに冒頭に述べたような独歩文学の根本理念の  
 形成に感化するとともに、その小説としての形象化の手法の上に  
 重要な示唆を与えたと思われるのである。そこで小論においては  
 こうした点で独歩の文学形成の上に及ぼしたツルゲーネフの影響  
 感化を中心として、独歩のツルゲーネフの諸作に接した経緯の一  
 端についても考察を進めることにしたい。

## 2

まず独歩がツルゲーネフの諸作に接した経緯について述べてみ  
 よう。その経路には次の三つを認めることができる。

- 1 二葉亭四迷の翻訳を通して
- 2 友人今井忠治の紹介、翻訳によって
- 3 英訳を通して

まず二葉亭による翻訳を通しての場合について概説しておこう。この経路については従来もしばしば説かれてきたところであるから、そういう点ではできるだけ重複を避けたい。二葉亭の訳になるツルゲーネフの作品中、独歩が読んだことの確証し得るものは、「あひゞき」④「めぐりあひ」、(二二年一〇月〜二二年一月「都の花」、単行「片恋」では「奇遇」)「片恋」(二九年一〇月「片恋」)「うき草」(三〇年四月〜一〇月「太陽」)の四作である。そうして「あひゞき」「めぐりあひ」その他の二葉亭訳を筆写研究していたらしい。(欺かざるの記)26・6・8——以下日付のみ記す。斎藤巾花著「国木田独歩と其周囲」P一九〇〜一九一)けれども独歩は二葉亭の訳でこれ以外のものをも読んだであろうことが考えられる。そこで二葉亭訳になるツルゲーネフの作品のうち、上記四作以外のものを年代順に挙げてみよう。「夢かたり」「猶太人」「くされ縁」の三作と、他に未発表の「けふり」があり、また翻案戯曲「わからずや」(三八年一月「文芸界」)がある。「けふり」を除いて、これらの作品は独歩が読んだものとしておそらく間違いないまい。「猶太人」は三十一年一月の「国民之友」第三六五号に発表されたが、同誌上には独歩が「今の武蔵野」の第一回を発表している。二葉亭訳ツルゲーネフの影響下に成った作品「今の武蔵野」と同じ号に掲載されたツルゲーネフの二葉亭訳を読まなかったとは考えられない。しかも独歩は二十九年の末頃から三十一年八月の「国民之友」の廃刊まで毎月のように同誌上に作品を書いており、彼にとって内輪の雑誌であった「国民之友」はかならず

国木田独歩におけるツルゲーネフの影響

や読んでいたことであろう。⑤また治子夫人は、それほど読書家でもない独歩が、二葉亭のものかならず読んだ、たいていの雑誌は寄贈を受けていたが、「文芸倶楽部」などの贈呈されない雑誌に二葉亭のものが掲載されると、大急ぎで購読し、会心の作があると彼女にも読ませて、文学談などを聞かせた、と言っている。(「中央公論」追悼「嗚呼国木田独歩」所収「家庭に於ける独歩」)したがって三十年四月および三十一年十一月の「文芸倶楽部」(いずれも増刊号)にそれぞれ掲載された「夢かたり」「くされ縁」も、きつと読んだに違いない。田山花袋も、二葉亭の作品はどんなものでも読まぬものはなかった、「くされ縁」などというものまで読んだ、と述べており、(単行「インキツボ」P九六〜九七)両者の二葉亭への傾倒の深さを示す言葉が一致を見ることは、興味深い。この引用文にすぐ続いて、花袋は、独歩に「太陽」から一冊に纏めた「うき草」を借し、それを返しに来た時、作品から受けた感銘を夢中で語り、作中の語句や登場人物の言葉などをまねて、感慨に耽ったこと、また逆に独歩所有の「片恋」を留守中に家の上って読んだことが述べられている。(P九七〜一〇〇)このことは、彼等のツルゲーネフ熱が、互いに作品を紹介し合い、書籍や雑誌を貸借し、感銘を語り合い、共感を求め、または議論を闘わすという密接な友人関係の中で醸成されたものであることを示す。とともに、独歩が読書家花袋とこうした関係にある以上、上に掲げた諸作をかならずや愛読したに違いないとの確信を深めさせられる。とくに「夢かたり」「猶太人」「くされ縁」の三作品はいずれも

三十年・三十一年の発表であり、この頃は彼等花袋や松岡（柳田）國男などの仲間の間でこのようにツルゲーネフ熱の盛んな時期でもあり、近く二十九年十月乃至十一月に「片恋」を読み、（29・11・22、田山花袋著「インキッポ」P九九、「東京の三十年」市民文庫P一〇一、「趣味」追悼号「文豪國木田独歩」所収田山花袋「渋谷時代の独歩」）また同じ頃今井忠治からツルゲーネフの話聞き、（29・9・14、29・10・18、29・11・19）同じ頃「うき草」をも読んでいるし、傾倒した二葉亭の翻訳のうちでも、ことに深い感銘を受けたツルゲーネフの作品のことであるから、これらを独歩はかならずや熟読したのであろうと想像されるのである。

次に友人今井忠治の紹介翻訳による場合であるが、これもすでに周知のことであるから、略述するに留めよう。「欺かざるの記」によれば、二十九年九月十二日の輪読会で今井は「初恋」を講じており、「病牀録」によれば、麻痺狂に罹って後でさえ、文辭ほとんど意をなさぬながら、なお独歩のためにツルゲーネフなどをたびたび訳したという。（全集V9 P八七）宮崎湖処子も、とくに渋谷時代には独歩はツルゲーネフに傾倒していたので、今井に独文から読んでもらって話を聞くというぐらいであったと述べている。（「文豪國木田独歩」所収「民友社時代の独歩」「決闘家」（三七七年四月「文芸倶楽部」）も今井の訳であると言われている。<sup>⑦</sup>

次に英訳を通して独歩がツルゲーネフの諸作に接した事情を考察してみよう。

田山花袋は「東京の三十年」に次のように述べている。

外国の文学の話になるとトルストイとツルゲーネフとドストエフスキーとゾラとアルフオンス・ドオデエとがいつも出た。Kは中でもツルゲーネフが好きであった。其時分は容易に手に入れることの出来なかつた『烟』の英訳を一冊持つてゐて、イリナの話をいつもKは持出した。何方かと言へば、かれはツルゲーネフの自然に対する形を好きであつたけれど、——『獵夫日記』のあるものなどは殊に好きであつたけれども、『烟』はイリナの恋がお信さんとかれとの恋に似てゐるので、殊にKは愛読した。『女つて、皆なかういふもんだよ』と言つたり、『本当にこの通りだ。Smoke, Smoke』と言ふあたりは何とも言はれない』と言つたりした。最後に、イリナがその男の許に行くところを評して、『これは蛇足のやうだが、さうぢやない。ここが大きいんだ、人生だ、広い不可解な人生だ』と言つた。（後略）（P二三八）

「KとI」の一節で、「K」は言うまでもなく國木田独歩である。彼は「烟」の英訳を所持して、これと「獵人日記」を愛読していたことがわかる。まず「烟」の方であるが、吉江喬松も「ツルゲーネフの英訳本を自分でも読み耽つたものである。彼が所持してゐて、幾回も読み耽つたカアライルの『英雄崇拜』と、ツルゲーネフの「煙」（千八百七十三年版、ニウヨーク）とは、独歩自身が自分の青年期の感懐を構成した記念の書物だといつて、死ぬ少し前に私に呉れたのを今も保存してゐる。」（國木田独歩研究）と言つてゐる。「一句一節一章録」（四一年八月「文豪國木田独歩」。「独歩小品」

では「恋の日記」に『「スモーク」の一冊が机の上に置いてある。」という「スモーク」はこの書物である。そこでは自己と治子との恋愛を「スモーク」のリトイノフとイリナのそれになぞらえている。独歩が「スモーク」を耽読して強い感動を受けたことは明らかである。

次に花袋が「煙」と並べて独歩の愛読書として挙げた「獵人日記」について考察してみよう。先に引用した「東京の三十年」の一節に、独歩が「獵人日記」を愛読したのは、ツルゲーネフの「自然に対する形」を好んだためであるとされている。「あひゞき」は言うまでもなく『獵人日記』中の一篇であり、ツルゲーネフの「自然に対する形」を最も典型的に示した作品として、独歩が傾倒したところであった。『獵人日記』には全般的にロシアの広大な自然を背景とした生活が描き上げられており、とくに自然描写の豊かな篇が多く、いかにも独歩好みの諸篇を多数含んでいる。だから「あひゞき」に傾倒した独歩が、『獵人日記』の全篇を英訳本で愛読したのは、きわめて当然のことであった。その時期は花袋の叙述から二人が日光照尊院に過す以前からであったことがわかる。

齋藤甲花によると、氷川町時代「独歩は、よく小形の英訳ツルゲーネフを読んでゐた。但し彼はその一冊を寝ても覚めても一字一句も忽にせず丁寧に読んだ。これも花袋からの借物だつた。」〔国木田独歩と其周囲〕P二一〇〕という。この英訳ツルゲーネフが何という作品であるかは不明である。また鎌倉在住時代には

#### 国木田独歩におけるツルゲーネフの影響

「当時の日本文学には餘り注意を払はなかつた。只寝ても起きてもツルゲーネフの全集を手にして耽読して居た。」〔新潮〕追悼号「国木田独歩」所収「鎌倉在住前後の独歩氏」ともいう。花袋は三十五年頃には「英語に訳されたツルゲーネフの全集ももうやつて来てゐた。」〔近代の小説〕角川文庫P七九〕と述べている。江馬修は独歩の読んだのはガーネットの英訳本であるとしている。「人及び芸術家としての国木田独歩」P一一一〕四十年の「文章世界」に、ツルゲーネフの英訳本にはガーネットの訳でハイネマン会社出版の十五冊の全集とアメリカのアスター・ライブラリー中のものがある、訳は前者の方がずっと文学的で立派であり、序文も優れている、値段は前者が一冊一円七十銭、後者が一冊九十銭で、後者の方がはるかに安く、いずれも丸善、中西屋に来てゐる、と説明されている。（第二卷第一〇号所収「文章顧問」、第二卷第二一号所収「和漢洋文学研究順序」）したがって独歩が鎌倉時代に読んだ全集とは、ハイネマン社版のガーネット訳であることがわかる。

このハイネマン出版の十五冊本全集というのは、実は選集であつて、現在京大文学部の図書室にその十二冊が蔵されている。書名は「The Novels of Ivan Turgenev」ロンドンのウェスト・セントラル郵便局区内ヘッドフォード・ストリート二一William Heinemannの出版で、黄土色布クロス丸背コンパクト判の書物である。訳者はConstance Garnett、ロシア語からの翻訳である。十五巻の内訳は第一巻「Rudin」（ルーヂン）欠本、第二巻「A House of Gentryfolk」（貴族の家）再版一九〇〇

年、初版一八九四年、第三卷“On the Eve.”(その前夜)再版一九〇三年、初版一八九五年、第四卷“Father and Children.”(父と子)第五版一九〇五年、初版一八九五年、再版一八九九年、第三版一九〇一年、第四版一九〇三年、第五卷“Smoke.”(煙)欠本、第六卷及び第七卷“Virgin Soil.”(処女地)第三版一九〇五年、初版一八九六年、再版一九〇一年、第八卷及び第九卷“A Sportsman's Sketches.”(獵人日記)再版一九〇二年、初版一八九五年、第十卷“Dream Tales and Prose Poems.”(夢語り散文詩)再版一九〇四年、初版一八九七年、第十一卷“The Torrents of Spring and Other Stories.”再版一九〇五年、初版一八九七年、第十二卷“The Torrents of Spring.”(春の水)“First Love.”(初恋)“Mumu.”(ムム)を収録、第十三卷“A Lear of the Steppes and Other Stories.”(曠野のシヤ王・他)欠本、第十三卷“The Diary of a Superfluous Man and Other Stories.”初版一八九九年、“The Diary of a Superfluous Man.”(余計者の日記)“A Tour in the Forest.”(森林の旅)“Yakov Pasinkov.”(ヤコフ・パシニコフ)“Andrei Kolosov.”(アンドレイ・コロソフ)“A Correspondence”(手紙)を収録、第十四卷“A Desperate Character and Other Tales.”初版一八九九年、“A Desperate Character.”(向く見せ)“A Strange Story.”(奇妙な話)“Punin and Baburin.”(プニン・バブリン)“Old Portraits.”(古い肖像画)“The Brigadier.”(旅団長)“Pyetushkov.”(ペチウシコフ)を収録、第十五卷“The Jew and Other Stories.”初版一

八九九年、“The Jew.”(ユダヤ人)“An Unhappy Girl.”(不幸な女)“The Duellist.”(決闘家)“Three Portrait.”(三個の肖像画)“Enough.”(充分)を収録している。

治子夫人は、独歩は読書もあまりしないし、書物もほとんど持たないが、その乏しい蔵書がツルゲーネフ二三冊と水滸伝くらいのところであった、と言っている。(前掲「家庭に於ける独歩」)このツルゲーネフも前掲の「スモーク」乃至はこの“The Novels of Ivan Turgenev.”全十五巻中の二三冊なのであろう。独歩には「非凡人」という作品があり、彼の三十五年四月八日付薄田泣菫宛書簡によつてこれがツルゲーネフ「アンドレイ・コロソフ」の翻案であることが明らかである。(「新小説」追憶録所収薄田泣菫「國木田独歩君」)これはおそろしくこの“The Novels of Ivan Turgenev.”第十三巻からの翻案であらう。とすると、独歩は“The Diary of a Superfluous Man.”“A Tour in the Forest.”“Yakov Pasinkov.”“A Correspondence.”をも同巻で読んだであらうことが推定される。また近松秋江は花袋から松岡国男が所有するハイネマン出版の上製の「オン・セイブ」を借りたと述べているから、(「文壇無駄話」河出文庫P五四―五五)これも独歩が借りて読んであろう。洋書の入手がかなり困難な当時であつて、花袋や松岡(柳田)や独歩等の仲間の間で互いに書物を貸借し合つていたことは、前に掲げた花袋や秋江や弔花の言葉からも知れるのである。もっともほとんど蔵書のない独歩はたいい借りる方であつたらう。

結局、このハイネマン社版ガーネット訳のツルゲーネフ小説集で、独歩がどれだけの作品を読んだかは確認できないが、これも「文章世界」第二巻第十三号の「文章顧問」中に「ツルゲーネフ中にては、何と何が最も傑作にて且つ面白きや。」との問いに答えて、「Rudin」、「Father & Children」、「Virgin Soil」の三作が挙げられている。この選集中にはツルゲーネフの主要作品は一応収録されており、独歩がこれらのうち、かなりのものを読んだのではないかと想像されるのである。

以上、独歩は英訳でツルゲーネフの作品中「スモーク」と「獵人日記」「アンドレイ・コロソフ」その他相当数をハイネマン社版ガーネット訳その他によって読んだであろうことが推定できるのである。

以上三つの経路以外に龍士会における話題から得たものや、嵯峨のやの「国民之友」に発表した翻訳や、独歩の雑誌であった「新古文林」に掲載された少数の翻訳との関係なども考えられるが、紙面の都合上、割愛しておく。

### 3

次に感化影響の検討に移ろう。独歩はいかなる面でツルゲーネフの影響を受けたのであろうか。この点に関して「雑談」(四〇一年一月「趣味」)で次のように述べている。

一体僕は大的無性者で、平生から読書なんか餘りしない方だが、先づ僕の好きな作家と云へば、「ツルゲーネフ」だろう。

国木田独歩におけるツルゲーネフの影響

さう、「ツルゲーネフ」の如何云ふ処が好きだと云つて、迎ても言葉や云ひ顯はせん。惣つか如何の此うの言葉に云ひ顯すと一種の型に入つたものになつて、真に僕の感して其のまゝのもので無くなつて仕舞ふ。まあ好きだから好きと云ふ訳なんだ。「ツルゲーネフ」の何の作が好きだと云つて別に取り出で、其と云ふ訳に往かん。どの作にも、其相応の面白味がある。手取早く云つて見れば、「ツルゲーネフ」の作は、どれもこれも好きと云ふ訳なんだ。

先刻好きだから好きと云つたが、強いて云へば、「ツルゲーネフ」のやうな自然人生の観方、描写の方法が気に入つてんだ。それに「ツルゲーネフ」の作にはバックに深い悲哀が横つてるやうに思はれる。——これは僕一人に然う感じられるのかも知れんが——此の点が誰よりも「ツルゲーネフ」の好きな所이다。——と云つて那様に沢山読んで居ないが——兎に角非讀書子なる僕の好きな作家を挙げれば、「ツルゲーネフ」以外には無いんだから……。(全集V1P五二五)

ここで独歩が述べている好きな点、すなわち自然、人生の観方と描写の方法、それからバックに漂っている深い悲哀感とが、そのままツルゲーネフの独歩に感化影響を及ぼしたところであろうことは、直ちに想像できるのである。

ここで独歩のいう「自然人生の観方」とはいかなる観方をいうのであろうか。「紅葉山人」(三五年四月「現代百人豪」)において独歩は次のように述べている。

(前略) 十九世紀の小説家中ツルゲーネフ最も深く人生の根底に触及して居るとの評ある所以も、畢竟ツルゲーネフの材を取る必ずしも珍奇の境に求めずと雖も、人間を観るや常に此大自らの懐に置いて見たからではあるまいか。ツルゲーネフの小説を読んだ者は必ず此消息を解するであらう。(全集V1P四三二~四三三)

すなわちツルゲーネフの偉大な所は人生を常に大自然の懐において捉えている点であるという。これこそツルゲーネフの「自然人生の観方」である。「雑談」で独歩はこの「自然人生の観方」と作品の背景に漂っている悲哀感とをツルゲーネフの好きな理由として並列的に述べており、両者を明確に結び付けて認識していかないようである。けれどもこの二つの事は単に並列的に理解すべき事柄ではない。後者は前者の結果として生ずるところなのである。独歩は決して論理家ではない。が、彼の直観は極めて鋭い。だから理論としては不備な点があつても、鑑賞は正鵠を射ている。ツルゲーネフの作物に憂愁と悲哀とを見ることは、今日ツルゲーネフ研究家の間では定説となつていようである。池田健太郎氏の文によつて、独歩の感想に理論的整備を与えておこう。「人間のかなさ、宇宙的な孤独を表わす章句をツルゲーネフの長短の小説に求めたらきりがあるまい。」「もともとツルゲーネフの創作の態度は、何か大きなもの——自然、永遠、時——と、みじめな小さいもの——人間、人生、瞬間——という二本の線の対比にのつていはしないか。この宇宙的な二元性が、彼の作の背景ではあ

るまいか。」「文学史家は、ツルゲーネフの自然の雄大さと人間のみじめさの対比を、三〇年代のロシアに流行した逃避的、やや厭世的な哲学詩の影響と考える。」「それは自然に対する人間のみじめさであり、永遠に対する瞬間のはかなさである。人は死すべきものという宇宙の公理の提示である。」(岩波文庫「散文詩」解説)

独歩はツルゲーネフのこのような自然人生の観方——永遠なる宇宙大自然の懐に有限瞬間の人生を置いて見るところから生ずる悲哀感に強く打たれた。これこそ「人生の深意を描いて見せて呉れた。」(「捕虜」全集V3P三二四)のである。そうしてこのような点で独歩はツルゲーネフから深い影響を受けた。この無限と有限の対比の醸す哀感が独歩文学の顯著重要な一大特色であることは、吉江喬松「国木田独歩研究」以来定説となつていいる。ツルゲーネフのこうした面での独歩への影響感化は早くから指摘されていたのである。が、近年は全く忘れられて、もっぱら自然描写の影響のみが唱えられてきた。今そうした古い時代の指摘を挙げておこう。明治四十一年七月の「新潮」追悼号「国木田独歩」には徳田秋江が「ツルゲーネフを愛読したのは、その自然の描写に意気の傾倒した所があつたろう。人生の運命を描いた所に寂しい哲学を発見したらう。」(「性格の人物田独歩」と、自然描写と悲哀感と独歩のツルゲーネフ愛読の理由として並べ挙げていいる。また馬場孤蝶は、独歩の作品には、作者の鋭利な観察力、一種諷刺の力、悲哀寂寥の感情等が明らかに表われており、この三点においてツルゲーネフの感化を受けたと思われるところがはなはだ多いと述

べているのである。(「作物皆感情の流露也」)このように独歩の死の直後すでにその悲哀感の影響感が指摘されたのであるが、後年にはこうした根本的な面は全く遺却され、もっぱら自然描写の影響のみが論ぜられて、今日に及んだのである。

4

次にツルゲーネフのこのような自然人生の観方、すなわち無限なる大自然と有限なる人生の対比より生ずる悲哀の情が、その作品にいかにか表われているかを、とくに独歩が接した作品について検討し、そこから独歩自身はどのような文学的方法を撰取したかを考察してみよう。これこそ語句や用語に関する描写上の影響撰取の問題よりも、より根本的な重要な文学的方法の問題なのである。

そこでツルゲーネフの作品からその悲哀の情のとくに顕著な箇所を挙げてみよう。

まず二葉亭訳「あひぶき」の結びは、「可哀さうと思つた『アクリナ』の姿は久しく眼前にちらついで、忘れかねた。持歸つた花の束ねは、からびたまゝで、尚ほいまだに秘藏して有る……: : :」となつてゐる。哀れな少女アクリナはその後どうなつたであろうか。からびた花束が時の流れを象徴して哀感の余韻を曳く終局である。

「めぐりあひ」は哀愁に充ちた一篇であり、その結びはこうである。「其後もウ何処でも此婦人を見かけなかつた。婦人の意中人

国木田独歩におけるツルゲーネフの影響

の名を聞たからは、婦人の何者といふ事も遂には、多分、聞出せたであらうが、自分は今聞出したくなかつた。以前にも云つた通り、此婦人は幻の如くに現はれた——がまた幻の如くに自分の傍を通りすぎて、鎮長に消え失せてしまつた。」ひそかに心ひかれながらも、それとなく永久に別れていかねばならぬ人の運命の哀しさを描き上げてゐるのである。

次に「片恋」の結びの部分を用用してみよう。

(前略) 私は今淋しい月日を送つてゐるが、アインシャの手紙とそれから今は乾びて了つたが、昔アインシャが投げて呉れた風呂草の花とは今だに重宝のやうにして藏つてある。花はまだ微に残香を留めてゐるけれど、それを投げて呉れた人の、後にも前にも僅た一度私の唇に触れた手は、今頃は最う疾くに土に帰つてゐるかも知れん……私とても——今は老込んだ。昔の我も、面白く心の噪いで嬉しかつた歲月も、止所もなく狂つた希望も意気も——今は皆痕跡も無くなつて了つた。之を思へば、果敢ない草花の幽かな香でも、人の喜憂よりは永く保ももので——だから人よりも寿命の長いものです。

蛇足を加える必要を認めない。草花よりもはかない人生なのである。

「うき草」の終局は千八百四十八年の共和党の乱である。長くなるので、引用は割愛しよう。そこには後年のルーヂンのまことにあえない最期が描かれてゐるのである。

次に同じく二葉亭訳「猶太人」は陣地の模様をスパイしたため、



絞罪に処せられるユダヤ人ギルシェリを描いている。最後まで助命を乞い、激しい生への執着を示しながら、処刑されていく年老いたユダヤ人の姿に、人の命の哀れさが強く迫るのである。

「くされ縁」のエピローグも、作品の中心場面からは十年程経過してからのことで、ベッシンコーフもすっかり変り、パン屋の主婦は既に死亡し、娘のワシリーサが結婚して後を引き受けている。オニシムはどうなったのか知っている者は一人もないというのである。移ろいややすい人の世の様が語られている。時の流れの中に跡かたなく消え去っていく人の営みのはかなさなのである。

独歩訳、実は今井訳と言われる「決闘家」のエピローグをなす教養のある博識な貴族青年キスターの決闘によるあえない死は、暗い帝政ロシアの階級社会の制度・しきたりの中で希望を押し枯らされた人間の哀しさと共に、静かな諦めをもって大地に横たわり、自然に帰ってゆく人間のはかない運命を示しており、そこにしみじみとした哀感を播曳させている。

以上は、独歩の読んだことを証明乃至ほぼ確実視し得る諸作品から挙げたのであるが、この悲哀感はずルゲーネフの他の諸作にも表われているのである。彼の主要な作品の大部分「ファウスト」「貴族の家」「その前夜」「初恋」「父と子」「春の水」や「散文詩」中の諸篇などはその代表的なものである。中には前掲の諸作よりもむしろ一層明瞭にその読みとれるものさえある。このうち「貴族の家」「その前夜」「初恋」「父と子」「春の水」「散文詩」はハイネマン版選集に含まれている。

ツルゲーネフの諸作にはこのように悲哀感が表われている。そうしてその悲哀感は、前述したように、大なるもの、永遠なるもの——自然、時と、小なるもの、瞬間的なもの——人間、人生との対比という、宇宙的二元性から来る、いわば宇宙観的悲哀感とでも言うべきものであるが、文学としてその形象化を果たす場合には、どのような方法が採られているのであろうか。とくに小説家独歩はそこからのような文学的方法を撰取したのであろうか。しばらくこの点を考察してみたい。

ツルゲーネフの作品における悲哀感には先に挙げた例から明らかにように、登場人物の死（あるいは衰老、永遠の生別）によって醸し出される。したがって登場人物の死を扱ったものが極めて多い。死こそは人生の有限性を具体的に示す典型的な事実である。またこの死が決まって終局に設定されており、またその終結は多く作品の中心部より年移り世を経た場面となっている。ここに永遠な時の流れが象徴される。そこでは中心部に描かれたような華麗な青春の歓楽は名残りなく消えて、淋しい死や、さらには死に遅れた者のうすら寒い残暦があるばかりである。こうした手法が作品の結びに尽きぬ余韻と哀愁を漂わせる。独歩は主としてこの手法を学び取ったのである。紙面の都合で詳しい論証は差し控えるが、「源叔父」「鹿狩」「河霧」「関山越」「帰去来」「浪のあと」「富岡先生」「少年の悲哀」「画の悲み」「酒中日記」「第三者」「春の鳥」「窮死」「都の友へB生より」「竹の木戸」はその典型的な例である。吉江喬松のいう「無限と有限との対照」すなわ

ち、「時の大きな流を基調として、その中に浮沈する人生の相をながめやるとき、総のものがその流れに捲き込まれてゆくのを思ふ時、一種の悲痛な感じが湧き上つて来るのである。」(国木田独歩研究)

## 5

ツルゲーネフの悲哀感には永遠無窮の自然と有限瞬間の人生との対比という宇宙的二元性からくる一面以外に、なお他の一面が存在する。それは強大な階級社会の圧力を前にした個人の非力を痛感する悲哀なのである。前者を宇宙観的形而上学的悲哀感と言うならば、後者は社会観的悲哀感とでも名付けるべき一面であろう。これについては前節の「決闘家」のところで少し触れておいた。

「スモーク」に表われているように、官僚貴族にも在外革命家にも頹廢と墮落を見てとったツルゲーネフはロシア社会の現実に絶望を感じ、それが一層深い悲愁の色を作品に重ねることとなつたのである。独歩にもそうした明治社会の暗さに根ざす人生の悲哀を形象化した面が、その「小民」の生活に取材したことと深い関連をもつて明らかに指摘される。こうした面もツルゲーネフの影響感化として見逃すことのできない重要な点なのである。だが、すでに紙数も尽きようとしているので、この面はここでは割愛せねばならない。

以上によつて独歩がツルゲーネフの感化影響を受けた主な一面、宇宙の無限性と人間の有限性との対比からくる宇宙観的形而上学

国木田独歩におけるツルゲーネフの影響

的悲哀感について明らかにしたのであるが、最後にこうした点に関してワーズワースやカーライルやモーパッサンなどとの関係を一瞥しておこう。

独歩は「病牀録」に「余が思想上の感化は、英のカアライル、ウオットオース等より、作品上の感化は、ツルゲネーフ、トルストイ、モウパッサン等より享受せり。」(全集V9p七六)と述べている。評論家、歴史家であるカーライルや、詩人であるワーズワースからは、小説家独歩は思想上の感化を受けたに過ぎない。作品の手法上の感化はやはり小説家であるツルゲーネフやモーパッサンに依らねばならなかったのである。ツルゲーネフにおける手法上の感化は前節で述べた。思想上でもツルゲーネフには、先述したように、宇宙、大自然の無限性と人間、人生の有限性との対比という点で、カーライルやワーズワースと根本的に共通したところがあった。まずカーライルやワーズワースに接した独歩が、間もなくツルゲーネフに傾倒したのは、この故である。もちろんそこにはこうした思想が東洋的、伝統的な性質のものであったことや、<sup>13</sup>独歩自身の素質的、環境的な特質やその経歴などの側面からの要因も考えられようが、今ここでそれらを論ずる余裕はない。とにかくカーライルやワーズワースからこのような思想を強く受けた独歩は同じ様な思想的な一面の強く見られるツルゲーネフに共感し、詩から小説へとその文学形態を転換してゆく際に、その作品は、前述したような手法の上で、重要な手本の役を果たしたのであった。しかるに晩年病床の独歩はこれほどの傾倒ぶりを示したツルゲ

「ネフ」をすでに飽いたと言ひ、それはその作が余りに貴族的、高踏的、非実践的、非活動的な為であると言っている。「病牀録」全集V(9P六七〜六八)そこにはモトパッサンなどへの傾倒の理由の一端なども考えられるのであるが、前述したように、ツルゲーネフからも社会観的悲哀感などの影響も受け、その作品の上に次第に現実味を加えていった独歩が、晩年にこのような言葉をついたことはいったいどのように理解したらよいのであろうか。なお小論には考究すべき幾つかの問題が残されたままであるが、これらはいずれまた稿を更めて論ずることとして、本稿を擱筆する。

(注)

- ① 益田道三著「比較文学的散步」
- ② もう古いことだが、こうした自然描写における影響感化の研究中最も早期のものであり、代表的なものである。「岩波講座日本文学」所収の塩田良平「国木田独歩」では「ツルゲーネフからは、自然描写以外の影響は少なかったと認めてよい。」と述べられている。
- ③ 平井照敏「『武蔵野』時代の独歩とモトパッサン」(『比較文学研究』第二巻第二号所収)にはその詳細な論述がみられる。
- ④ 斎藤甲花は独歩の口からよく「あひゞき」の中の林間の静けさを書いた一節を読んで聞かされたという。(『国木田独歩と其周囲』P一九)
- ⑤ 甲花が初めて独歩に会ったのは三十四年夏のことであるから、独歩は二十六年五月三十日に「あひゞき」を読んで以来、後年までも愛読していたことがわかる。
- ⑥ 山田博光「独歩と民友社」(『文学』第三三巻第一号所収)には独歩が「国民之友」の廃刊まで在社したものと考証している。
- ⑦ 「文壇無駄話」によると、近松秋江もまたこの「太陽」からちぎっ

て綴じた「うき草」を花袋から「これで国木田も柳田も見たのだ。」と言って借りたという。(河出文庫P五五)

- ⑦ 小山内薫は独歩訳とは名ばかりで、実際は独歩訳ではないということだとあっており、「新潮」追悼号「国木田独歩」所収「故独歩の作物に就て」平塚篤も全然他人の代作であると言っている。(近代文学鑑賞講座「国木田独歩」所収「独歩君の思出」江馬修は「是は今井が元を訳したのである。」「人及び芸術家としての国木田独歩」P一一)と述べている。瀬沼茂樹氏の言うように、たしかにその訳文には意味の不明瞭な箇所がある。(全集V4解題)
- ⑧ 京都府総合資料館にはこの初版本一冊だけが所蔵されている。
- ⑨ 京都府総合資料館にある「The Author Prose Series: (アスター散文書)の“Snake”」は同じくニューヨークで出版されているが、一八七二年の版権で、独歩所有のものとはおそらく別であろう。
- ⑩ 「欺かざるの記」の晦渋さなども幾分はこうした点に根ざしている。
- ⑪ 「貴族の家」などはその最も典型的なものである。
- ⑫ アレクサンドル二世に農奴解放の志を立てさせたのは、皇太子時代に読んだ「狼人日記」であったという。この反農奴制的な書物の出版のため、ツルゲーネフは同年ゴリへの追悼文を理由に逮捕、追放の目に遭った。
- ⑬ 大谷深「ロシア文学の翻訳と日本文学」(『国文学』第四巻第五号)はロシア文学作品の邦訳紹介された篇数を作家別年代順に統計しているが、これによると、ツルゲーネフは最も早くから明治時代を通じて最も盛んに翻訳紹介された作家であることが明らかである。氏は「ロシア文学の影響の点から云って、明治時代は即ちツルゲーネフ時代でもあった。」と言っている。ツルゲーネフがこれほど読まれたのも、一つにはその東洋的、伝統的な性格に通ずるものがあるが故に比較的受け入れ易かったことが原因となっているのであろう。
- ⑭ 引文中、「全集」とあるのは、すべて学習研究社版国木田独歩全集である。